

海賊のセキスタント

第一章 媚麗キャスター

夏期休暇

「ハイ、お疲れ様！」

アシスタントディレクターの声とともに、スタジオ内に張りつめていた緊張が一挙にゆるんだ。

テレビカメラがさっとひいていき、ライティングの光度が落ちていく。

朝の情報番組『モーニング・J』のメインキャスター平松久美子はほっとした面持ちで原稿を揃えている。

ヘッドセットをつけたADが丸めた台本を小脇に挟んで近づいてきた。

「良かったですよ。久美子さん——」

彼は職務上の義務的なねぎらいを口にした。平松久美子は美貌をかすかにほころばせ、軽く会釈して立ちあがる。スラリとした身長と白のスーツに包まれたプロポーションが今更ながら若いADを圧倒した。今日の彼女は黒髪をうしろで束ねているので輝くような美貌がなおのこと印象的である。知的な顔立ちとはこういう顔を言う

のだろう。冴えた額。濃い眉。意志の強そうな瞳。キリリとひきしまった口元……。テレビ用のメイクはそれらをくっきりと強調している。しかし、知的というだけではとうてい平松久美子の魅力を言い表わしてはいない。知的な中にも、それを上まわるほどの色香がしっとりとにじんでさえいるのである。朝の番組にはもったいないパーソナリティだと、ADはいつも思うのだが、だからこそ、この『モーニング・J』の視聴率は激戦時間帯のなかでも上位に健闘してるのだ。平松久美子がいなければ、高視聴率はもちろん番組の存続自体危ういものにちがいがなかった。

「どうしたのよ、安西君。疲れたの？」

久美子の艶のある声が彼女の隣の席でまだ立ちあがろうとしないサブキャスターの安西にかけられた。ドテツと椅子の背に身体を預けて、肩の凝りをほぐすように首をグルグルまわしている。

「しっかりしなさいよ。明日から夏休みじゃないの」

「へへ。だからなんか気が抜けちゃいましてね」

安西は日焼けしたハンサムな顔を久美子に向けて、妙に整った白い歯並びを見せつけながらニツと笑った。大学出立ての局アナの彼は新人ながら久美子の相棒に抜擢されるほどの爽やかな語り口をもった美男子だ。

「若いくせに、だらしないぞ」久美子はからかいながら安西の頭を小突いた。

「僕がいない間、浮気しちゃいやですよ、久美子さん」

「そんな暇なんかあるもんですか。内閣改造の取材が入ってきてるんだから」

久美子は真紅のルージュののったあえかな唇を尖らせた。すったもんだの末、首相はどうやら今週中にも改造に踏みきるらしい。朝の番組としては硬派の内容だが、久美子自ら前線に立って直撃取材するのでけっこう視聴者からの支持があった。水もしたたるような美女が海千山千の政界の古狸たちと丁々発止する姿は、なかなか刺激的でもある。

「久美子さんだって、もう一週間すれば休暇じゃないですか」と、ようやく安西は立ちあがった。

「それも三週間たっぷり」と

社員である安西の休暇は一週間。フリーランスでも三週間は長いほうだろうが、実力、人気を兼ね備えた久美子には当然の権利であった。

「どこへシケこむつもりですか？」

「シケこむとは穏やかじゃないな」

二人は連れ立ってスタジオをあとにした。もちろんこれで仕事が終わりでではない。これからすぐに明日の放送の下準備に入るのだ。

「旦那さんと二人で楽しむんでしょう。大学の教授だから、とっくに夏休みですもんね」安西は悪戯っぽく笑

った。

「教授ではなくまだ助教授です」

久美子も笑いながら答えた。笑うと小粒の歯がこぼれた。

(なんていい女なんだろう)

安西は気づかれぬように胸の内で嘆息した。

(まったく、こんないい女を毎晩抱けるなんて、男冥利につきるだろうよ)

彼女の亭主に激しい嫉妬をいただきながら、安西はかすかに視線を彼女のブラウスの胸に這わせた。薄い水色のブラウスは胸もとのボタンをひとつだけはずしている。軽いアクセントとしてつけている金鎖のチョーカーが、覗けた白い胸ぐりのVゾーンにきらめいている。その横に――ブラウスにわずかに隠れる部分に――安西は小さな黒子があるのを前々から発見していた。ただの黒い点なのに妙に色っぽく感じられる。ブラウン管にはよほどアップにでもしないかぎり映らないので、平松久美子の胸ぐりにそんな黒子が存在している事実を知っているのは亭主と俺ぐらいではないかと、安西はひそかに下品な優越感をもっていた。

胸はムンとふくらんでいる。ブラウスがたわんで双つの丸みをつくり、歩くたびにわずかに上下動を繰り返していた。

(九十はあるだろうな)

安西はそう値踏みしている。こういうキャリアウーマンは自分がグラマラスであるのをどこか恥じる傾向にあるので、小さく見せようとブラジャーをきつくしめている場合がある。久美子もたぶんその例にもれない。というのも、いつぞやデパートで亭主と買物をしていた久美子とばったり遭遇した時があって、工作中より、ひとまわりもふたまわりも巨きな印象を受けたのだ。

(ブリブリの巨乳。いいなあ、こんないい女、どこかに転がっていないもんかなあ)

安西は再び嘆息した。この頃は、平松久美子と毎日仕事をともにできる幸運を喜ぶより、平松久美子を自分のものにできない不幸を呪うようになってきた安西であった。

「ほらほら、デレツとしていないで。休暇は明日からでしょ。今日はまだお仕事お仕事」

まったく勘ちがいをしている久美子は反省会の開かれる小会議室の扉をあけて、安西の背を押しこんだ。

午前十時のオンエア終了後から、ほとんど休憩なしで番組のVTRをチェックし、細かな言葉遣いから目線の配りなどを確認する作業がつづけられた。そして明日の番組の取材の編集、ゲストとの出演交渉と、分刻みのスケジュールをこなしていく。

……だから、昼食はいつも仕出しの弁当ですませる日が多い。

「久美子さんは幕の内でもいいっすか」

安西の言葉に、久美子はふと腕時計へ目を落とした。

「あ、御免。今日は外で食べてくるわ。人と会う約束があるんだった」

久美子は脱いでいたスーツのジャケットを片手にとって立ちあがった。半袖のブラウスから剥きでた腕の細さと雪肌がまぶしい。

「マゼンダにいるから。急用ができたならそっちに連絡してください」

久美子は小走りに会議室をあとにした。

マゼンダは隣のビルの二階にある洒落た喫茶店だ。久美子が駆けこんだときには昼休みの時間をややすぎているので、すいていた。

久美子は店内を見まわし、窓際の席の一人の女性客に視線をあわせた。その女性客も久美子に気づいたようだった。どちらからともなく、手をあげ、確認しあう。

「久しぶりね、ねね」久美子はにこやかに握手を求めた。

「久美子、元気そうじゃない」彼女も立ちあがって、さしだされた手を握った。

遠田ねね……久美子の大学時代からの親友である。彼女は弁護士をしている。そして、久美子と同様に、職業名の前に『美人』の言葉が必ずついてまわるほどの美貌の持ち主であった。

二人はほぼ二年ぶりの再会を喜びあった。お互い、仕事が仕事なだけに急がしくてなかなか会えないのだが、ブランクを感じさせないほど、すぐに打ち解けられた。

昨日、突然、ねねから電話があってぜひ会いたいといってきたのである。

「久美子の番組はできるだけ見るようにしてるから、なんだか久しぶりじゃないみたいだわ」ねねは笑いながら言った。

「昔の友達に会うとみんなそう言うわね。あんた、学生の時のままだって」

「フフフ。いつも澆刺としていたものね、久美子は」

「あら、そうかしら……」

あなだって少しも変わっていない、と言いかけて久美子は口をつぐんだ。ねねは学生時代とは比べものにならないほど変貌していた。いやいや、二年前と比べても別人のようにちがっている。在学中に司法試験にパスするほどの秀才の彼女は精悍な顔つきで、鋭い目つきをし、ギラギラした野心を奥に秘めている人間特有の雰囲気があったものだ。身体つきもどちらかといえばスレンダーでしなやかなスタイルの良さを誇っていた。

今、久美子の目の前にいる遠田ねねは、特徴的だった長い髪——法廷に立つときはそれをポニーテールにしていく——をバツサリと切り、前髪を眉の上で揃えた女学生のようなオカッパ頭をしているのも手伝って、先鋭的

だった当時の印象は消えているのだった。顔にもポッチャリと肉がつき、丸顔になっている。肉がついたのは顔だけでなく弁護士然としたスーツに包まれた身体もだ。胸と腰は女盛りの年齢を誇示するように厚く成熟し、肉感的と呼んでいいほどの脂ののりを見せていた。弁護士というより、小料理屋の、小股の切れあがった若女将の風情であった。むろん、それはそれで、まだまだ人目をひく美しさではあるのだが……。

「私は変わったでしょう——」

ねねは久美子の視線を察して微笑を浮かべる。細いアメリカ製の煙草を一本抜いて、口にくわえた。ブランド物と思われる品のいいライターでその先に火をつける。

気のせいかな、その一挙手一投足が艶然としていて、久美子には夜の女のそれを連想させた。薄い煙をたなびかせながら、ねねは何かを思いだすように眩しそうな視線を窓から見える真夏の六本木の雑踏に向けた。

久美子には彼女の変貌ぶりの原因がどこにあるのか、薄々想像できないわけでもなかった。彼女についての良からぬ噂を耳にしていたのだ。ねねは最近、同じく弁護士である夫と開いていた法律事務所から、別の法律事務所に移ったのだという。もともと彼らの夫婦仲はいいとは言えなかった。二年前、徐々に久美子が疎遠になっていったのも、仕事が忙しかったからばかりでもなく、会えばすぐに夫の悪口をいう彼女に嫌気がさした部分もあ

ったのだ。

しかしその後、彼らは寄りを戻したと聞いていたのだが、なぜか、ねねは一人ちがう事務所へ移ったのである。その移籍した先の法律事務所が、うさん臭い会社の顧問弁護士を専門にやっているような事務所なのだった。

学生時代、社会運動にも強い関心を持ち、修業期間をすぎて夫ともに独立すると、採算を度外視した、百パーセント人助けのような仕事ばかり受けていたねねが、である。どういう経緯があったかはわからないが、正反対といってもいい進路の変更が、彼女の内と外に大きな影響を及ぼしたと考えても、当たらずとも遠からずであろう。

しかしそれらはすべて憶測にすぎないのだ、と久美子は自分に言いきかせた。予断に基づく判断こそ良識あるジャーナリズムの最大の敵なのだから。

気まずい沈黙は運ばれてきたカフェインの苦味の強い香りに中断された。誰にでもある汚れのない無邪気な青春時代の思い出話が戻ってきた。しばらくは、二人のキャリアウーマンも、どこにでもいるOLと同じようにケラケラと笑い声をあげ、手を振りあってはしゃぐ一時をすごした。

「あなた、こんなのに興味ないらしら？」

ねねがさりげなくアタッシュケースからとりだしたの

はパンフレットである。

「なにこれ？」久美子は受けとると、表紙をまじまじと見つめた。

「もうすぐ休暇なんでしょう。計画はできてるの？」

「まだだけど……」

『豪華キャビンクルーザーですごすタラソセラピーの休日。南紀、東四国、瀬戸内を周遊する二週間の船旅——』

そこにはそういう見出しが踊っていた。どうやらリゾートクルージングのパンフレットらしい。手作りといった感じのワープロ編集である。しかし写真はプロが撮影したように素晴らしいものである。表紙には小綺麗なヨットハーバーに停泊中の大型クルーザーが美しい船体を休ませている姿が映っていた。船首に近い横腹に『エスペランサ二世号』と書かれている。

「タラソセラピー？」久美子はつぶやきながら一ページ目をめくった。

『タラソセラピーとは海辺で潮風や日光を浴びながら生きた海水や海藻などの海洋資源を体内にとり入れることにより、人類が本来持っている自然治癒力を活発にし、身体の機能を高めるための療法のことでありま

す……』

「まあ、ストレス解消のためのリラクゼーションと
いったところかな。シーフードをたらふく食って、磯の
かおりを吸いながら、ひねもすボォーッとしていようと
いう、ようするにそれだけのことだわ」

ねねは煙草の灰を灰皿に落としながら久美子の反応を
うかがっている。

「普通はリゾートホテルなんかに長期滞在して、プロ
グラムをこなすんだけど、それをヨットの上でやるうっ
てわけ。そっちの方が理にかなっているわね。なにしろ
——外洋のただなかなんだから」

「……あなた、こんな勧誘までやっているの？」

久美子はやや警戒したような目つきで尋ねた。

ねねは苦笑しつつ、煙草を揉み消す。

「まさか。これ、私たちも去年行ってきたのよ」

「へえ……」

ねねは身を乗りだしてきた。

「陸のうえの雑事が些細に思えるほど、クルージング
は最高。このヨット、夫婦二人でやっているの。旦那さ
んは一等航海士で大型船の船長の経験もあるベテラン。
奥さんはフランスまで行って療法士の資格をとってきた
本格派で、料理の腕もシェフ並みだわ。人柄も太鼓判を
押せる」

ねねはパンフをめくって指をさした。そこには日焼けした中年男女の写真が載っていた。なるほど人柄のよさそうな笑顔である。ともに五十代半ば、だろうか。万田清三、幸子。それが彼らの名前だった。クルーザーの操舵にあたっている清三の写真もある。半袖のポロシャツからニョッキリとでた太い腕っぷしは逞しい海の男そのものだ。女房の方は女性をデッキにうつぶせに寝かせて、裸の背中へペースト状の海藻パックをしているところ。緑色のペーストが白い肌にまんべんなく擦りこまれている。

「見た目はちょっと違和感があるけれど、これは気分爽快よ。それに彼女のマッサージは天下一品。マッサージ師の資格もあるみたい」

「悪くはなさそうだけど、こんな大きな船、二週間も貸切なんて、べらぼうな値段でしょう」

久美子はそう言いつつも、視線はパンフレットの写真から離れない。

ねねは彼女の様子に満足気にほほえみながら値段が表記されている欄を示した。

「ウッソー！」久美子は思わず女子大生のように叫び、自分のその軽薄さに肩をすくめた。ケタがひとつちがうのではないかと思われるような金額が書かれていたのである。

「どう？ 海外のリゾートで一週間すごすよりも、ず

っとお得でしょう」

「どうしてこんなに安いのよ」

「そうね。結局、このご夫婦は儲けようとしているわけではなくて、自分たちの愉しみのためにやっているようなものなのよ。若い夫婦と語らい協調しあってクルージングすることが、人生最大の贅沢だと思っている。だから宣伝も口コミだけ。ゲストも当然知的でハイセンスな人間ばかりが対象となるわけね。むろん、久美子だから私も安心して勧められる——」

「お眼鏡にかなって嬉しいわ」

久美子はニヤニヤしながら言った。そして疑問をひとつ口にした。

「でもいくら大型クルーザーといっても海のうえでは閉ざされた密室でしょう。そこで二週間も他人の夫婦と顔をつきあわせていれば、息が詰まってしまわない？」

「大丈夫——」ねねは請け合った。

二週間のうち五日は彼らが契約しているリゾート施設やホテルのある港に寄港し、陸でのリゾートを楽しむというのだ。瀬戸内海に浮かぶ無人島の探険なんかもあって、閉塞感なんてまるでないと、ねねは力説する。

「海での生活は単調に見えて、そのじつ、私たち陸の人間から見れば驚くことばかりよ。退屈している暇なんかないわ」

頬にかかった黒髪を耳の後に掻きあげ、コーヒーの入ったマグカップを手にする。ひとくち啜りあげると、再び口を開いた、

「私がこうしてわざわざ勧誘なんかしているのは、もちろんクルージング自体が素晴らしいということもあるけれど、この万田夫婦の魅力に惹かれたからだと思う」

と、女弁護士は何かを思いだすような目つきになって、つづける。

「彼らの人生観、人間観、自然観、そして夫婦愛……ギスギスした都会では決して出会えない人間的な魅力に接することこそ、最大のセラピー（治療）、休養なのよ」

ねねは最後のページを開いた。夜の海だった。夜空には満天の星が宝石のように散りばめられていた。月光が溶かしこまれた輝くような海に優雅でモダンなエスペランサ二世号の船影が浮かんでいた。帆をおろし、静かにたたずむキャビンクルーザーは夢幻的なほどロマンチックだった。

「私たち夫婦が危機をどうにか乗り越えられたのも——あなたも知ってるでしょう。私たちが離婚寸前だったってこと——彼らに出会えたからだわ。このクルージングを最後に綺麗さっぱり別れましょうということだったんだけど、陸に戻ってきたときはすっかりわだかまりが消えて、自然な気分になって、もう一度やり直してみ

よう、不思議なことに彼も私も同じようにそう考えていた。海には、そして海に真剣に向きあっている人間たちには、得体の知れない大きな影響力があるのよ」

ねねの悟りきったような口調が、久美子にはちょっとおかしかった。が、エスペランサ二世号の魅力は彼女をとらえてしまったようである。二三年前、ちらっとかじった経験のあるスキューバダイビング——仕事が忙しくなって道具は埃をかぶっている——をまたトライしてみるのもよかろう。日頃すれちがいの多い夫、由紀夫と二人で夜のデッキで肩寄せながら星を眺めるのも悪くない。

「……このパンフレット、もらえるかしら」久美子は思い立ったように言った。

「旦那に相談してみるから」

「もちろんどうぞ——」

ねねは目を細めてそれを手渡した。こみあげてくるらしい笑みが、彼女の美貌全体を痺れさせるようににじんできた。

出航

南紀水道に面した和歌山県西南部の港町はのどかに平松久美子を迎えた。

空気はすんでいたが、日ざしは東京のそれより暑く、JRの駅に下りたった久美子は額の汗を何度もぬぐった。荷物はヨットクラブ宛てに宅急便ですでに送っているので、小さなトランクがひとつあるだけ。それをガラソとした駅舎のベンチにおいて、一息ついた。

人目を避けるためのトンボのサングラスをとって、目頭を押さえる。薄紫色のアメリカンスリーブは両肩を大きく剥きだしているので、日ざしがチリチリと肌を焼いた。それに白のスラックスが彼女の服装。

久美子は一人でここまで来ていた。夫、数学者の由紀夫は京都で学会があり、その足でこちらに向う予定である。

(とにもかくにも、やっとこ着いたわね)

東京から慌ただしく飛行機にとびのり、大阪からはJRの列車の旅だった。スケジュールの都合でどうしてもこういう面倒な手順になったが、ここまで来ると、やっとテレビキャスターの激務から解放されたのだと実感が沸いてきた。これから三週間、あの秒刻みの神経を擦り減らすようなスタジオに足を運ばなくてもいいのかと思うと、ほっとする。

そしてそのうちの二週間は、大海原——ちょっとオーバーだが——での生活が待っているのである。

海には人を勇気づける大きな力がある——、と言った遠田ねねの言葉は正しい。まだその海を目にさえしてい

ない今から、久美子の胸中はわくわくするような不思議な期待感で一杯であった。

（子供みたいだわ）久美子はクスッと笑いながら駅舎から出てみた。高層ビルがひとつもない駅前は何年ぶりだろうか。高層ビルはおろか、二階建だってほとんどない。だから空は限りなく広く思えた。その空はまるで海のように青く澄みきっていた。蝉の声がとても近く感じられ、東京で聴くよりも力強く大量で、これが本物の蝉時雨なのだろう。

久美子は思いきり伸びをして、深呼吸を試みた。スモッグも排気ガスも無縁の空気に磯の香りがかすかに混じっている。身体が軽くなるような爽やかな気分。全身の筋肉が蕩けていきそうだった。

駅前のメインストリート——舗装されているし、たぶん、そうなのだろう——には車の影もなく人通りもない。このひなびた港町のどこかにあの豪華なエスペランサ二世号が停泊しているのかと思うと、奇妙な感じがする。しかし、ヨットクラブから担当者が迎えにくることになっているのだ。万田船長夫婦とはそれから会う段取りである。

やがて一台のジープが駅に向ってきた。

久美子の前で停まると、ウィンドウが開けられる。

「平松久美子さんで？」

「そうです。ヨットクラブの方？」

窓から覗きあげた青年は浅黒く日焼けした顔に白い歯をほころばせていた。

彼はテレビで有名な美人キャスターと随行できる光栄にはしゃいでいる感じであった。車中でも饒舌で、久美子の仕事の話にこそ触れなかったが、この町や自分のこと、万田船長夫婦の評判についてをよく喋った。船長夫婦の評価は東京ばかりでなく、ここでも最高点がつけられていた。

車は海岸線の道に出た。さっと視界が百八十度開けた。久美子は窓から身を乗りだすようにして歓声をあげた。コバルトブルーの海が無限の広がりを見せているのだった。

「南紀水道ですよ」

都会の人間が自分たちの海に感嘆しているのに満足しながら、青年は片手ハンドルで説明する。

「向こうが太平洋。あっちが四国。そっちへ進めば、瀬戸内海。あなたたちご夫婦はそのすべてを周遊することになるわけですよ」

「素晴らしいわ！」

久美子はほとんど叫んでいた。窓からの風に黒髪がたなびき、透明感のある小さな肩とほっそりとした二の腕を撫でている。

海に心を奪われている美女の隙をつくように、青年はちらちらと女体を観察した。都会の金持ち相手のヨット

クラブに勤めてから、ちよくちよくこの田舎以外の美女を目にするようになっていたが、こんな上玉は初めてだ。テレビで評判になるくらいだから当然だけれど、ブラウン管を通すより、実物の方が何倍も魅力的に感じる。ほとんどノーメイクに近いからだろうか、年齢が若く見えるのだ。瓜実顔の目鼻立ちは洗練されていて、あくまで知的。しなやかな黒髪は量が豊富で艶々としている。それにあの服……。映画『氷の微笑』でシャロン・ストーンが着ていた服そっくりじゃないか。乳白色の胸もとがきわどく露出していて、ちょっと屈めばふくらみが覗けそうな気がしてくる。豊満な臀部に貼りついたストラックスにパンティラインが浮きでて見えないかと、目を凝らしたが、さすがにそこまでサービスはしてくれていない。しかし、まるやかに熟れた腰つき……。青年の股間は熱くこわばりきっている。

男の淫らな妄想を打ち消すように、女はまた歓声を発した。

ヨットハーバーが見えたのだ。もやいで繋がれた大小のヨットがそれぞれ棧橋に並んでいる。何艘かはそこを離れて、堤防の向こうの沖へ滑りだそうとしていた。

「ね、エスペランサ二世はどれ？」久美子は青年の肩を叩いて訊ねた。

その感触があまりにも柔らかかで、しかも彼女の吐息が首筋にわずかに吹きかかり、青年はゾクゾクしてしま

う。

「えーと、ですねえ——」声も上擦っている。

「あ、あれですよ！ あそこのいちばん奥に係留されているデカイやつ！」

久美子のはなやかな嬌声がすぐに沸き起こった。全長二十五メートルにも及ぶキャビンクルーザーの巨体がここからでもはっきりと見てとれたのだった。

「やあ、よろしく！ 万田と申します」

エスペランサ二世号の偉容をバックに、岸壁で初めて紹介された万田船長は、快く久美子と握手をかわした。

「お世話になりますわ。船長」

写真で見るのより、船も船長も立派に感じられた。ヨーロッパ風の海の男タイプだわ、と久美子は感心した。風格があり、ハンサムで、マナーはすべて心得ているといった物腰である。

「こちらこそ。貴重な休暇を我々の船ですごして戴けるなんて、光栄です」

万田はにっこりと微笑んだ。初対面の警戒心をゆるませる人懐っこい笑顔だ。背はそれほど高くないが、半袖の白のポロシャツ——これは写真と同じだ——を身につけたがっしりとした逆三角形型の上半身に、海浜パンツから露出している赤銅色の太腿、どれも鍛えぬかれていて、都会の男ならとっくに脂肪まみれになっている年齢なのに、それとはまったく無縁である事実を誇示してい

た。

（由紀夫の方がよっぽどオジさんだわ）久美子は内心首をすくめた。

「さあ、どうぞ！ エスペランサ二世号をご覧になってください。妻もいます」

由紀夫が着くのを待っていようかとも思ったが、万田船長の躍動的な語り口と手ぶりに、久美子は彼の後につづいていた。

エスペランサ二世号は美しい流線型のフォルムをしていた。表面は純白に塗装され、未来的で機能的な魅力をもっていた。船の中央に高いマストが立ち、そこに帆が張られ、風を孕んで疾走する様を想像すると、それはじつに官能的ですらあるように思われた。

「素晴らしい船ですわね、船長」

棧橋から舷梯を昇りながら久美子は溜め息混じりに言った。

「ありがとう。ヨットマンは腕を誉められるより船を誉められるほうが嬉しいものです」

久美子に手を貸し、甲板に招きあげる。

久美子はふーっと甲板のうえを眺めまわした。そこは整然と片づけられ、すべてが機能的に配置されているようだった。むろん、ヨットについてはまるで素人の久美子だが、とにかくそういう印象を受けたのである。

「こちらは操舵室にナビゲーションルーム。そして向

こうから船室へ下りていきます」

ハッチを思わせるトランクタイプの扉があった。そこが音もなく開いた。中からショートヘアの女性が現われた。やや小太りの身体を船長と同じくポロシャツと海浜パンツに包んでいる。

「幸子、ゲストの方がお見えになったぞ」万田はさっそく彼女を紹介した。

「エスペランサ二世号の副船長であり、機関士であり、料理長でもある……」

「そして万田船長の愚妻でもある——」

彼女はそう言って悪戯っぽく微笑み、久美子に視線を戻して、

「幸子ですわ。エスペランサによろしくお会いしました。これからの航海が本当に楽しみです」

二人は堅く手を握りあった。幸子もこんがりとした日焼けしており、パッチリとした目元には雀斑がめだっている。厚い胸、厚い腰、万田船長には似合いの海の女であった。

「私はご主人の方をお迎えにいらしてこよう。そろそろ電車が着く頃だ。船室を案内してさしあげなさい」と、万田は幸子に言い、自分は棧橋へおりていった。

二人は狭いタラップを踏みながら、エスペランサの船内におりた。

「わりと広いんですね」久美子は感心しながら言っ

た。

細い通路に立った幸子はてきぱきと説明する。

「向こうが、船首の方ですけれども、私たちの居住区。ゲストルームは船尾に位置します。プライバシーに配慮した造りになっています。扉も厚いし、波の音もあるし、まず話し声は聴こえませんわ」

なるほど、それは好ましいことだ。さすがに都会の客を相手にしているだけあって、行き届いている。

幸子はまず、通路中央にある扉を開けた。かなりの面積を持った部屋である。床は赤いレザー張りで、壁はマホガニー調。床に固定されている家具もすべてアンティークに統一されている。

「食堂兼居間です」

「落ち着いた感じですね」

「ありがとう」幸子は嬉しそうに微笑んだ。

「隣が調理室。その次がシャワー室——」

「シャワーまであるんですか！」久美子は驚きの表情を見せる。

幸子は扉を開け、中を披露した。

「狭いけど、ちゃんと真水で洗えますよ」

「へえ——」目を丸くする久美子。

「残念ながらバスはついていません。でも大きなたらいはありますわ」

幸子はおかしそうに笑った。

「甲板の上で行水はできます。真夏は最高に気持ちがいいですよ。海に出てしまえば、覗かれる心配はないし」

久美子は口笛を鳴らした。さんさんと照りそそぐ陽光を浴びながら、三百六十度の海を独り占めにし、素っ裸で沐浴するなど、どんなに気持ちいいだろう！

「もちろんその時は、甲板は男子禁制にしますけどね」

幸子は久美子をうながし、ゲストルームに案内する。

「荷物はすでに運びこんでおきましたわ。スキューバをやられるんですね」

「ええ、まあ……でもほとんど初心者とお考えください」

「船長は——」と、幸子はかすかに誇らしげな表情を浮かべて言った。

「潜水の方もベテランですよ。美しいポイントも幾つも知っております。一緒に潜られるといい」

「楽しみですわ」微笑ましい夫婦の愛情を感じて、久美子はいい気分になった。

ゲストルームも全体がアンティークにコーディネートされて、セミダブルのベッドや棚、クローゼットなども重厚な風合いを保持していた。とくに久美子が気にいったのは、天井にとり付けられた扇風機の巨大なプロペラである。ハンフリー・ボガードの映画に出てくるような

骨董品だが、錆び具合までこけむした感じでなかなか雰囲気があった。

ベッドが面している壁に丸い舷窓があって、海と空の青さが目に染みるようだった。

（早く夜にならないかな）と、久美子は思った。ここから星空を見つめながら、由紀夫と寄り添い、さしこんでくる月明かりの中で身体を求めあう。贅沢な時間をすごせるのは受けあいだった。

二人は再び甲板上に出た。

「本当に、本当に素晴らしい船だわ」久美子は感嘆のつぶやきを繰り返した。

「エスペランサは私たちの人生そのものですわ」

幸子は言った。日に焼けて褪せている黒髪が涼風になびいている。

「ご存じでしょうけど、『エスペランサ』とはスペイン語で『希望』という意味です。私たちが七年前、全財産をはたいてこの船を買ったとき、主人は少し自嘲気味にこの名前をつけたんですけど、その名のとおり、エスペランサは我々に無数の希望をもたらしてくれました。海の美しさ、自然の雄大さ、そして何より、多くのゲストをひきあわせてくれました。あなたのような素晴らしい若者と懇意になれるなんて、それこそ私たち夫婦の最大の希望の実現なのです」

なにか面映ゆい気分ではあるが、彼らのしっかりした

哲学にふれたようで、久美子はもう一度、幸子と手を握りあった。

ほどなくして、万田の運転するジープが到着した。

「主人ですわ」久美子はデッキの手摺りにつかまって身を乗りだした。

ジープから万田船長と平松由紀夫がおり立った。万田がこちらを指さすと、由紀夫は日ざしを手で遮りながら、最愛の妻を認めた。

久美子は笑いながら手を振った。由紀夫も手を振り返したが、少々、照れたらしくすぐにやめ、万田と顔を見あわせて笑った。

「どうやら彼らもウマがあったようですわね」

幸子も嬉しそうである。

甲板にあがってきた由紀夫は久美子に微笑みかけ、そして幸子に自己紹介する。学会帰りなので、まだ背広姿の彼。ハンサムではない。どこか野暮ったい印象さえ与える。見た目だけなら、人気の美人キャスター、平松久美子には不釣り合いな男といえるだろう。しかし由紀夫は数学の世界では気鋭の研究者として知られ、将来を嘱望されている若手なのである。それに人柄も気さくで飾り気がない。天才学者にありがちな偏屈なところもなく常識人だ。

久美子とは学生時代からの仲であるが、結婚したのは卒業後、しばらくしてからである。今年でもう四年目。

が、新婚当時のようにまだまだ愛しあっている二人だ。最近、お互い多忙なため、生活がすれちがいになりがちなのが頭痛の種。だからこそ、休暇はスケジュールを無理にでも調節しあって、同時にとるようにしている。

このクルージングをもちかけた久美子に対して由紀夫もすぐに乗り気になった。ヨットの旅も新鮮だったが、何より二人きりになれる時間を多く持てそうだったからだ。洋上なら美人キャスターのスキャンダルを狙ってたむろしてくる写真週刊誌の目も気にしなくていいだろう。

『遠田君はなかなかいい話を持ってきたくれたねえ』と、由紀夫は例のパンフレットを見ながら言ったものだった。

「では、さっそく出港といきますか。潮の具合がいいので、燃料費が少し浮くでしょう！」

万田船長は快活に笑いながら操舵室に入っていく。幸子もきびきびと働きだした。係留ロープをとぎ、甲板に投げだす。そしてアンカーを電動ウィンチで巻きあげはじめる。エンジンが始動した。エスペランサ二世号に生命が宿り、力がみなぎりだした。

「お二人はバウへ行ってごらんなさい！」

船長が操舵室から顔をだして、大声を出した。彼は船首を指さしている。

由紀夫と久美子は慌てて甲板をよるめきながらそちら

に移動する。

「船首はバウというのか」

と、由紀夫は久美子の手を握りながら、尖った船首の突端に立った。

「私も知らなかった」

久美子も夫の腕にすがりつくようにして、離陸のショックに備えて身体を安定させる。しかしエスペランサ二世号はほとんど揺れのないまま、岸壁から離脱した。ゆっくりと後退し、湾内へ滑りだすと、そこでエンジン音の調子が変わり、ガクンと停止する。それから船首を右に向け、今度は前進を開始する。

透明な青い海のうねりを、砕き、あるいは乗り越えるのが、船首にいと手にとるようにわかった。港をとり囲むように突きだしている堤防の間を、エスペランサはスピードをあげてすり抜けていった。

夫婦最後のセックス

二人は船室にいったんおりて、着替えをしてから甲板に戻った。

「水着になればよかったのに」

由紀夫は妻の耳もとでささやいた。彼女はストラックスを半ズボンに替えただけで、アメリカンスリーブの上か

ら白の薄いカーディガンを羽織っている。

「まだ早いわよ」

久美子も小さく言い返し、由紀夫の腕をつねった。由紀夫はブルゾンに、これも短パンである。

「出し惜しみしちゃって。女盛りのプロポーションを見せつけてやれよ」

からかうように笑う由紀夫。冗談半分なのだが、妻が理想的な肉体の持ち主であるのを自慢したい気分もあるのだ。それは久美子にもわかっているもので、頬を少し赤らめながらもう一度、腕をつねった。

「セクハラよ」

海は少し風がでてきたようだった。後を振り返ると、すでに港は遠い景色になっている。

「いい風です」と、万田船長は操舵室からでてきた。

「帆をあげましょう」

それは意外に簡単な作業であった。久美子と由紀夫のヨットの知識といえ、アメリカズカップに代表されるような競技ヨットのニュース映像くらいのもので、それから類推すると、ずいぶん汗みずくの重労働を予想していたのだ。

しかし、エスペランサ二世号は自動メカニズムを配備したハイテク船であるらしい。マストの下部に折り畳まれたセールはボタンひとつですると上昇していった。しだいにそれは二等辺三角形に近い形状に開いてい

き、と、同時に風をとらえて大きくはためいたのだ。船長と交替して操舵室に入っていた幸子がエンジンを停止させた。

今やマストポールの最上部まで昇りつめたセールの尖端から、広い面積を有する一面までがいっばいに開ききった。万田はセールの角度をランニング（追い風）の微妙な方向に調節した。すると、セールは重々しい音を唸らせながら、大きく湾曲し、風を完全にとらえたことを示した。エンジンを切ったため惰力にまかせていたエスペランサ二世号の推進力にグンと力が加わった。機械的な推進力とはどこがちがう生々しさが感動的だった。

ヨットはほとんど波のない静かな海を水平線をめざすように走りはじめた。

「しばらくは自動航行装置にまかせておきましょう。ナビゲーションルームへどうぞ。これからの航路を詳しくご説明いたします」

万田が先に入った操舵室はまるでジャンボジェットのコクピットのようなだった。壁一面に機器が並んでいるのだ。唯一、誰も手にしていない舵輪だけが昔ながらのウッディな代物である。

「最近は一―」と、万田船長はさも忌まいましたように言った。

「人間は何もしなくてもいいようになっとるんですな。コンピューターとやらが発達したおかげで」

彼は機械類の一つひとつをコツコツ叩きながら説明した。これが磁気コンパス、これが気圧計、これがGPS（人工衛星の信号をとらえて現在位置を知る装置）……。

「もちろんこういうものは有効なのです。壊れないかぎりには」

「よく壊れるんですか？」久美子は訊ねた。

「まさか。残念ながらほとんど壊れません。小さいヨットなら転覆して水をかぶって機械が全部お釈迦になるケースはありますが、エスペランサくらいになると、それもまずないことですよ」

万田が機械やコンピューターに対して純朴な偏見を持っている大衆の一人と知って、数学者の由紀夫はおかしくなった。

「しかしひとたび落雷を受ければ、電子機器は全滅ですわね」

「ほう。ヨットに雷が？」

「これは稀にあることです。そうなると後は人間の力だけが頼りとなる」

嬉しそうに言う万田。

「心配なさないでください」

幸子が万田をたしなめるような視線で射、二人には笑顔を向けた。

「船長は何万分の一の確率を誇張しているにすぎませ

んから。それにもしそうなところで、無線のスペアもあるし、陸も近い。何も心配しなくてよろしいのです」

「ハハハ、これは失敬。出航したばかりなのに、恐がらせるようなことを言ってしまいましたな」

「大丈夫ですよ。威臨丸だって太平洋を渡ったわけですからね。マゼランは世界一周した。コンピューターなしで」と、由紀夫。

「私たち、船長の腕を信じていればいいわけですよ。もし緊急事態が起きても」

久美子はつづけて言った。

「おお！」万田は両手をあげて嘆声をあげた。

「副船長。今回のゲストはお二人とも揃って、私のファンであるらしい！ これは珍しいことだよ。君を出し抜いて私がファン投票第一位になるなんて！ ま、今日の夕飯までの栄誉かもしれんがね！」

笑いながら船長は二人を続き部屋になっている小部屋に案内した。そこにはテーブルがおかれ、その上には海図が広げられていた。壁には日本地図、地形図、海流図が貼られ、本棚にも水路誌、灯台表、魚類図鑑などが並べられている。

「ナビゲーションルームにいるときがいちばん心が落ち着きます」

万田は海図のうえに転がっていたデバイダや色鉛筆を

横へ除けた。

「ここが今我々が出てきた港です」

紀伊半島の海岸線の一点を指で示した。そこは黒丸で囲まれている。

久美子は興味深げに覗きこんだ。黒丸から直線が太平洋の方へ走り、そこからほぼ直角に折れ曲って、今度は四国の東部海岸へ到着している。そこにも黒丸が符られている。直線は瀬戸内海へ向かい、複雑なコースをたどって、また元の位置に戻りついていた。

「この直線がプロパーコース、目的地への予定のコースです」

万田は腕時計を見て、数秒考え、赤鉛筆と三角定規を操って、プロパーコースのラインの上をわずかばかりトレースした。

「現在位置はこの地点です」

赤丸をつけ、脇に日付と時刻を書きこんだ。

「まったく予定どおりにクルージングしております」

万田はプロパーコースを指でなぞっていき、四国の黒丸を示した。

「今回の寄港地は全部で六ヶ所を予定しています。このまま順調にいけば明日の夜には第一の寄港地に到着するはずですよ。そこではホテルのラウンジを予約しておきました。我々があなたたちを招待いたしますよ。しつこいようですが、このクルーズを休暇に選んでいただいた

感謝の気持ちをこめまして」

船長の心遣いに二人はいたく感動して、なんども礼の言葉をつらねた。

「……ゲストの方々から最大級の賛辞を預かるのは、このポイントかも知れません」

と、船長の太く頑丈そうな指が止まったのは、瀬戸内海の一点であった。そこには黒丸ではなく星型の印がつけられている。

「なんですか」と、久美子。

「無人島の探険です」

万田が真面目な顔をして言うので、久美子は吹きだしそうになった。テーブルの下で、由紀夫のサンダルが久美子のサンダルを踏みつけた。

「そう言えば、ねねからも聞きましたわ」

久美子は慌ててとり繕った。そして由紀夫の足を蹴り返した。

「あ、遠田ねね——ご存じですわね？ このクルーズを紹介してくれた友人、いや恩人かも知れません」

「もちろん存じてますとも！ 遠田先生夫妻には去年、私どもをひいきにして戴いたばかりか、それ以後も何かと親交を暖めさせてもらっていますから！」

ねねの名前を聞くと、万田の機嫌がなおさら明るくなった。

「あのご夫妻も、この無人島の探険にはいたく感動し

ていらっしやいましたよ」

「で、その島には何があるんです？」由紀夫は船長の顔をうかがった。

「島自体、ちっぽけなものなんですが……」と、そこから急に声のトーンを沈めて、「ここはその昔、藤原水軍が風避けに使っていたという言い伝えがあり、噂では島のどこかに埋蔵金が眠っているらしいのです」

「藤原水軍？ それはまた途方もなく昔の話ですね」

「ふふ、なかなかロマンがあるでしょう。ま、噂の真偽はともかく、海鳥のたちの楽園でもありますから、探険というより、散策気分で上陸してみるといい」

船長が全行程を説明しおわる前に鐘が鳴った。

「ん？ 副船長、何があったのかな？」万田は窓から甲板の上の幸子に声をかけた。

「船長！ イルカです！ イルカの大群がエスペランサを歓迎してくれています。お二人とも早くこちらへ！」

二人は万田よりも先に操舵室を出、幸子の元へ走った。彼女が指をさす海面に黒っぽいゴム質の背ビレが十数個も猛烈なスピードでエスペランサと並走しているのだった。

久美子が歓声をあげたのと同時に、一頭が見事なダイブを披露した。それにつられて、次々と海面からイルカが飛び跳ね、波間に尖った嘴から突っこんで沈んだ。そ

れらはヨットの横腹にぶつかりそうになるほど近づいたかと思うと、さっと、離れていき、そしてまたダイビングする。

「珍しいことではありません」と幸子は言った。

「イルカは遊び好きな動物ですから。でもこんなに多い群れは私は初めてです。幸運ですわ。きっといい航海になるでしょう！」

自然のイルカショーは約三十分もつづいた。やがて愛敬たっぷりの海の知恵者たちは遊び飽きたのか、それとも無尽のエネルギーを受けて疾走するエスペランサとの競争に疲れたのか、静かな波間に見えなくなった。

あれほど照り輝いていた太陽も、気がつくやうに西の空にかたむいている。オレンジ色から赤みを帯びてきて、蜃気楼のように燃え立つ水平線に光束を落としているのだった。美しい夕映えの時刻まで、こうしていようと、久美子は由紀夫の手をしっかりと握っていた。

夕食はまるで夢のようなひとときであった。船長の提案で、後甲板に食卓がつくられたのだ。真夏でも夜の海上はかなり冷えこむものだが、風も穏やかだし、波も静かなのでちょっと服を着こめばじゅうぶん愉快にすごせる状況であり、それならばと、最初の夜を記念して船上ディナーとなったのである。

「プラネタリウムのようなかわ！」

久美子は満天の空を見あげて驚嘆した。天球儀の真ん

中にいるような星空の大パノラマがエスペランサ二世号を包んでいる。

「まったく素晴らしい！」妻の肩を抱きながら、由紀夫もそれ以上言葉がつつかない。

おりしもマストの最上部にとりつけられていた白熱灯も消され、辺りは暗闇が支配した。が、すぐに目が慣れていき、月光を反射して揺らめいている濃紺の海面がぼろとした二人の視力を回復させた。それはもちろんきらめきを乱舞させている星々の競演をよりファンタスティックにする心憎い演出であった。

船長は食卓のテーブルにランプをおいた。年代物と思われる洒落たデザインで、マッチの火をともし、くもったガラスが凸レンズの役目をはたし、ほのかな光源となって、食卓の上を浮かびあがらせた。

椅子に座っても、久美子は上を向き放しである。

「カシオペア座はどれですか？」

船長は困ったような笑顔を作った。

「馬鹿だなあ、久美子。あれは冬の星座じゃないか。今は見えないよ」

「あら、そうだったっけ」

「まったく見えないわけではありませんが、これだけ夜もふけてくると、水平線のしたへ隠れてしまいます」

食卓は笑いに包まれた。そうだ、星座には季節があるのだ。小学生程度の知識もすっかり忘れてしまっている

自分の日常に、久美子は少し恥いったが、赤らめた顔はうまく闇に紛れてくれたにちがいない。

「ちなみにあれが北極星です——」と、万田は天空を指さした。

「古代から北半球の人間には最も馴染み深い星のひとつと言えるでしょう。丸木舟で無謀な航海に乗りだした古代人も、コロンブスもマゼランも、威臨丸の船長も、皆、あの星を頼りにしていたのです。人工衛星から情報をえられる時代になった今の船乗りたちでさえ、ときおり、あの星にセキスタント（六分儀）の標準をあわせて、コースをたしかめている。なぜなら機械は人の子であり、壊れも狂いもするが、星は神の恵みであって、決して人間を裏切りはしないからです」

万田船長はつかえずに自分の蘊蓄を語れたことに満足気にうなずいた。

幸子が食事を運んできた。厳選された銀器に盛りつけられた料理は、フランス料理風で、新鮮な海の幸ばかりを素材にしていた。

遠田ねねが絶賛していたように、エスペランサ二世号の料理長の腕は一流ホテルのシェフ並みであった。

「どうです？ 彼女のファンに宗旨がえしたくなかったですでしょう」

万田船長は白ワインのグラスを口に運びながら言った。

「残念ながらそうせざるをえないでしょうな。このおいしさはベテラン船長の航海術をじゅうぶん凌駕するものです」

由紀夫はムール貝のムニエルに舌つつみをうちながら答えた。

「すべて海産物で、素材を生かすよう工夫しております」と幸子。

「タラソセラピーの一環ですから」

久美子も由紀夫も喋る時間も惜しいとばかりにフォークとナイフをあやつった。二人は幸子のタラソセラピーの解説やフランス時代の修業の話に相槌しながら、もっぱら聞き役にまわった。やがてデザートのアイスクリームがで、コーヒーならぬ海藻のジュースが食卓におかれた。ようやく一心地ついた久美子はテーブルに両肘をつき、コップを手のひらに包みこみながら、再び夜空を見あげてうっとり眺めた。

「昔の夜はみんなこうだったのでしょうな」と、万田は言った。「光などは足元を照らす程度でじゅうぶんなのかも知れません。こうした暗闇の中で、シェークスピアはハムレットを、モーツアルトはフィガロの結婚を生みだしたのです。目尻の皺までくっきり見せつける現代文明の夜は、なんと非芸術的な時間であることでしょうか」

「そうですわね、船長」久美子は皮肉っぽく答えた。

「テレビのスタジオほど明るい場所もないでしょうが、顔のアラを隠すために数日で小瓶がひとつなくなるほど、お化粧をしなければなりませんもの。詐欺的とは言っても、芸術的とはとても言えませんね」

万田は彼女のジョークに声をあげて笑い、由紀夫に向かって、

「光のなかでも、薄暗がりのなかでも、どちらでもお美しくみえる女性を奥様しておられるあなたが羨ましくてなりませんよ」

「さあ、それは……」由紀夫は曖昧に口籠もりながら微笑み、ジュースを飲んだ。

蠟燭の炎がしだいに細く小さくなって行って、ずっと消えてしまうような自然な感じで、夕食は終わった。幸子は食器を片づけに船内に戻り、万田はナビゲーションルームにこもって気象データの点検や船位確定の計算をするという。

二人は連れ立って船尾に向かった。そこにはフィッシングのためのデッキチェアがあり、ナビゲーションルームからも死角になっている。

「寒くないかい？」椅子に座りながら由紀夫は久美子を気遣った。

「大丈夫。綺麗ね。星……」久美子は並んだ夫の肩に頭を寄りかからせた。

由紀夫はその肩に手をまわした。女体の感触が柔らか

く伝わってくる。こうして照れもせずロマンチックな雰
囲気にひたれるのは結婚前の一時期以来だろう。知的で
男勝りの活躍をしている久美子の女らしい一面なのだ。
これもまちがいなく彼女の人となりなのだが、決して視
聴者の前には見せない側面である。夫の自分だけが垣間
見られる本当の平松久美子なわけで、こういった時、由
紀夫は世間に対して単純な優越感を覚えるのだ。もちろ
ん彼女の肉体は自分だけ――処女ではなかったが、結婚
前の話は、まあよそう――が知っている。しかしそれは
視聴者全員が『知っている』、とも言えるのではない
か。毎日、無数の好色な視線が久美子を映しだすブラウ
ン管に注がれている。その視線はスーツを焼きつくし、
ブラウスを剥ぎとり、下着を耂りとり、彼女を丸裸にし
ているはずである。男たちの逞しい想像力の手は彼女の
豊満な乳ぶさを揉みしだき、恥毛を搔き乱し、尻を撫で
まわす。彼らの長い舌は乳首をころがし、性器を舐めし
ゃぶっている。彼女と性交に耽る妄想を抱いている男た
ちは、毎朝、いったい何万人いるだろうか。いや、実際
の話、ブラウン管に向かって朝勃起したペニスから精液
をほとばしらせるのが日課の男だってきつといるはずな
のだ。

そう思えば妻の肉体はすでに由紀夫だけの物とは言い
がたい。有名人を女房にした男の宿命だが、だからこ
そ、由紀夫は久美子が見せる精神的な深層こそ注目す

るわけだった。弱い、女らしい自分の姿を夫にだけは隠そうともしないのは、久美子もそれに薄々感づいているからであり、そこに深い彼女の愛情を認められるのである。

由紀夫はいっそう力をこめて、妻のなおやかな肩を抱きしめた。久美子も、積極的に身体を密着させてくる。肋骨の辺りに丸い豊かな乳ぶさの感触が刺激的だった。

「寒いんじゃないのか」由紀夫はもう一度聞いた。

久美子は顔にかかった黒髪を掻きあげながら左右に首を振った。

「ずっとこうしていたいわ」

自動帆走する船体を作り出す海面のうねりをじっと見つめている。

「でも、ここではこれが精一杯だよ」

由紀夫は彼女の顔を正面に向かせて、その唇に唇を重ねた。かすかな喘ぎが果実のような甘い唇から漏れてきた。しっかりと抱きあいながら鼻頭をぶつけあう激しいロングキスになった。かたちのよい鼻孔から乱れた鼻息がこぼれる。舌腹を舐めあい、蕩けるような唾液を吸いあった。

久美子の顔がボォーッと上気しているのがわかった。由紀夫は彼女を抱きあげるように立ちあがった。

「……まだいたいのに……」

たしなめるように言ったが、腰は柔らかく従順的だ。

足取りも由紀夫のそれになっていた。

「僕はもう我慢できないんだからさ」

由紀夫は彼女の腋の下から手をさしいれ、乳ぶさをつかんだ。服の上からでもそれが熱く、期待にしこっているのがわかった。

ナビゲーションルームにはまだ明かりがついてい、万田船長の影が窓に映っている。

「まだ働いてる」と久美子。

「彼らだって、これから――」由紀夫は彼女の黒髪に口づけする。

ゲストの船室に戻った二人は、服を脱ぐのももどかしげに裸になった。

久美子のヌードは非常灯のわずかな光のなかに青白く浮かんでいた。あの満天に輝く星のように、暗がりには彼女の裸身をいっそう官能的に見せた。肩幅もしっかりある上半身。くっきり浮きだた鎖骨から、見事なほどたわわな双乳のふくらみまでの距離が欧米人のようにあまりない。それでいて、ふくらみには量感があり、片手ではつかみきれない肉丘が成熟している。乳輪はピンク色でまだ赤みがさし、少し巨きめ。陥没知らずの乳首はピンと上を向いていた。鮮やかにくびれたウエスト。そして下半身。小判型の恥毛は毛先が長く、艶は最高。熟れ盛りの臀部がまるまるとグラマラスで、太腿はあくまで逞しく、膝下はほっそりと長かった。

「ああ、綺麗だ、久美子——」

かすれ声で抱きつこうとする彼の手からするりと身体をよけ、久美子はベッドのうえに駆けあがった。由紀夫を挑発するように、胸を張り、両手で黒髪を掻きあげた。ゾットするほどの妖艶さだった。もう本当に我慢がならなかった。

由紀夫は彼女の腰にタックルしてベッドの上に押し倒した。二人は獣のように相手の身体に四肢をからめた。由紀夫の勃起したペニスが太腿に密着した。あおむけになっても潰れない乳ぶさが由紀夫の胸を押し返した。彼女の身体は発情しきっていて、とても熱かった。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

第二章 船上の美肌

恍惚の指

クルージング二日目。

今日もぬけるような青空がエスペランサ二世号を迎え

た。

朝食前に、由紀夫は甲板にでてみた。昨日よりもさらに風がなく、気温も高いようである。

「お早ようございます！ 平松さん」

操舵室から船長が顔をだした。血色のよいその顔は満面に笑みを浮かべている。

「昨夜はよく眠れましたかな？」

「ええ、船長。ぐっすり眠れましたよ」

「奥さんも？」

「もちろん！ 妻も快適な船旅を喜んでいます」

万田は声をあげて愉快そうに笑った。

「それは良かった。深夜をすぎてから、ちょっと波がでたので、心配していたんですよ。お酔いにならなかったかと――」

それはちっとも知らなかったな、と由紀夫は首をすくめた。彼はデッキの手すりに身体を寄りかからせ、海を覗いた。エスペランサ二世号はセールをおろしてエンジン航走していた。大柄な船体がつくりだす海面のうねりは白い気泡を浮かびあがらせている。それはあっという間に後方へ見えなくなった。その繰り返しを、由紀夫は飽きもせず眺めた。いや、その目は少しもそれを見てはいなかった……。

昨夜、あれからもう二回、久美子と交わったのだった。三回……と、由紀夫は口の中でつぶやいた。

(この俺が三回もできるなんて、まったく、殊勲賞にかなう健闘だぜ)

思いだし笑いが由紀夫の口元をゆるませた。

(俺が三回できたのも驚きだが、あの久美子が三回やらせたのは、もっと信じられないことだな。奇跡と呼ぶにふさわしい)

二人の間にはセックスは一夜に一度きりという不文律が厳然と存在していた。だいいち、由紀夫には二度も妻の豊満な身体を抱ける体力と精力はなかったし、久美子の方も、それに不満をもっている様子はない。その不文律をモラルのように思っているらしかった。

(それが二度ならず、三度まで……)

由紀夫は、おお、海よ！ と大声で叫びたい心境であった。出航初日の晩に早くも大いなる自然の恵みを甘受した幸運に感謝したい気分であった。陸上の生活はよほどストレスに満ちているのだろう。ハイテクに囲まれた都市生活もキツキツの人間づきあいも、すべてがおおらかなセックスを阻む敵であろうと由紀夫は分析した。しかしもっともらしい分析など、それこそストレスの原因なのだ。ただ素直にこの紺碧の海に畏怖の念を抱けばいいのである。

由紀夫は己れのペニスの根元にいまだに残る久美子の肉の輪の締めつけの火照りに想いをはせた。二度目も、三度目も、むろん由紀夫のほうから求めたのだが、久美

子もほとんど拒まずにそれを許したのである。一度目より二度目が、二度目よりも三度目のほうが、久美子の悩乱が激しかったのは特筆すべきだろう。子宮にそそぎこまれる精液が多くなればなるほど、いよいよ彼女の肉体は発情し、敏感に反応するのだった。

そのあまりの激しかった夜ゆえに、いくら夫婦とはいえ、すました顔でお早ようと、いつものように朝を迎えるのも何か気まずいと思い、由紀夫はこうしてベッドから早めに抜けだしてきたのだった。それに、昨夜の自分のサデステックと呼んでも仕方のないようなやり方を、久美子がどう思っているのか、心配でもある。

ベッドのなかでは、たとえ口では嫌がってはいても猛々しい夫の変わりようを、どこか喜び、受け入れていたことは肌を通して理解できたのだが、さて、朝になり、常軌をとり戻した久美子——知性的で、男女同権主義者の彼女——が、いったいどう判断するのか、由紀夫にはわからなかった。まさか、腹を立ててクルーズを中断し下船するなど、子供のように言いだすとは思えないが、自分へ軽蔑的な視線を送り、口を聞いてくれない「リベンジ」は十分ありえる。なぜなら、ただの一度のフェラチオのあとがそうだったからだ。

しかし、ちがうのは由紀夫のほうの心境である。心配はしているものの、戦々競々ではなく、久美子がどういう顔をして自分と接するか、どこか楽しみにしている、

第三者的な余裕が今回はあるのだ。

(俺も成長したということか。それともこれも大自然の影響力か)

由紀夫が思いに耽っていると、万田が操舵室からできて肩を叩いた。

「朝食の準備ができたようです。行きましょう」

二人は連れ立って船内の食堂へ向かった。

食堂のテーブルには、すでに久美子がきていた。

「お早よう……」

顔色を覗きながら、由紀夫は隣の椅子に座った。久美子はノースリーブではなく長袖のピンクのTシャツを着ていた。半ズボンをやめ、白のパンツスーツにしている。肌の露出を嫌っているのは明らかだった。顔も化粧をほどこして、昨夜の濃厚なまぐあいの痕跡を船長夫婦に悟られまいとしている。ポニーテールに髪をまとめているのは、少しでも清楚に見せるための方策であるにちがいない。

「お早よう」と、久美子は由紀夫に視線をやりながら言った。

その目の色、声の質から即座に計算して、由紀夫はこう判断した。

(怒ってはいない。しかし完全に昨夜の行為を肯定しているわけでもない)

なるほどそれはまったく久美子らしい反応である。自

分が燃えあがった事実を否定するほどの厚顔さはないが、彼女にも女としての誇りがあり、キャリアウーマンとしての自負もある。無条件に男の獣性を容認するわけにはいかないのだ。

「副船長、お二人はよく休まれたそうだよ。あのヨットの揺れの中で、なかなか見所があるじゃないか」

万田は盛りつけられたトレイを運んできた幸子に声をかけた。

「そうですね。奥様は波の音が子守歌のようだったとおっしゃってましたわ」

「なおさら、いいねえ。海のうえで楽しめるための、大きな条件をクリアしたということだ。船酔いは何もかもを憂鬱にしますからな」

（この二人には――）と、由紀夫は船長夫婦を盗み見た。（昨夜、俺たちが何をしたか、わかっているだろうか？）

十中八九、わかっているだろうと由紀夫は思った。由紀夫ではなく、久美子を注意深く観察すればやはり明白だろう。久美子の隠匿の努力は、すればするほど、彼女を突出させてしまっているし、なんといっても今朝の彼女はたっぷりと愛された女だけが持つ、匂い立つような美しさに満ちているからだ。肌の白さがきわだち、胸の位置が昨日よりほんの少し低く、そして丸く大きくなっている。目の輝きも艶やかな濡れを含んでいるようだった

た。

ああ、可哀相な久美子。せっかくカメラの向こうの無数の好色な視線から逃れてきたというのに、海のうえでも、好奇な観察眼の対象となってしまった！

「さあ、戴こうじゃないですか。食べながら今日の予定をお話ししましょう」

万田は快活に言って、フォークを手にした。久美子がそれにつづき、由紀夫もスプーンを口にした。昨日の夕食と同じように、エスペランサ二世号のシェフの腕に二人は感嘆の声をあげた。

——船体の左舷の横腹にくくりつけられていたディングーを海面におろし、万田と由紀夫が乗りこんだ。二人は魚釣り用の道具一式を狭いボートのなかに持ちこんでいる。

午前中、由紀夫は万田にフィッシングを誘われたのだ。ちょうど、マダイが釣れるポイントなのだと言船長は解説した。

「ほほう、それじゃ、今晚のおかずを料理長に売りこみますかな」

由紀夫は快諾して、軽口を叩いた。久美子としばし別行動できるのは、由紀夫にとってはありがたかった。ディングーは三人が乗って自由に釣りが楽しめるほど広くはなく、自動的に久美子はエスペランサに残る順番になる。

「新鮮な大物でなければお断わりいたしますわよ」
幸子は言い、久美子にウインクした。

「主人は釣りだけはなかなかの腕前ですわよ」
皮肉っぽく、久美子は言った。

『立派な釣り竿を持っておりますもの』今にも久美子がそう言いだすのではと、由紀夫はひやひやものであった。

しかし、久美子は、「あなた、船長に迷惑かけないように気をつけて行ってらっしゃいな」と、妻らしい言葉で送りだした。

ディンギーは万田がオールを握り、力強く漕いで、エスペランサ二世号から離れていった。

「午後からは――」と、幸子が久美子に言った。「奥様がスキューバをお楽しみください。万田が付き添いますわ」

「船長、お忙しいわね」

「ご心配なく。あの人の体力は太陽エネルギーのように無尽蔵ですから。朝食の後片付けが終わった後、奥様には海藻パックとマッサージをしてさしあげますわ」

幸子は微笑みながら船内へおりていった。

(無尽蔵の体力か……) 久美子は額にかかったほつれ毛を撫でつけながら、遠く点のようになってしまったディンギーのうへのふたつの影をみやった。

昨日の由紀夫には、その無尽蔵の体力を感じないわけ

にはいかなかった。思いだすと、久美子の頬が年甲斐もなく薔薇色に染まった。あんなに痺れるようなセックスは何年ぶりだろうか。由紀夫との性生活ではおよそ未経験のものだった。彼にあれほどの力があったなんて、まさしく青天の霹靂だ。意外、驚き、そして喜び……。久美子の胸中は複雑だが、そう悪い気分ではない。

由紀夫が垣間見せた度を越した嗜虐性も、セックスにバリエーションをつけるための方便と割りきるつもりである。いずれにせよ、ああされても感じた事実は消えない。苛められて、優しくされたときよりも悶えたのだから、責任は彼だけにあるのではない。

（私ってマゾ？）たしかに自分もおかしかった。ああされて怒るところか、メソメソと泣いて、そして呆気なく情欲に巻きこまれるなど、東京のマンションでなら考えられない展開だ。

久美子も由紀夫と同様、己れの変貌ぶりをこの大海原の、自然のせいにしていた。しかし、事情は由紀夫よりやや深刻。すべての世俗の呪縛から解放されて、いきつく先がマゾヒズムであるとはフェミニストの久美子にとっては許しがたい結論である。それではアンチ・フェミニストが唱える、女はもともと男に従順に仕えるために自然に存在していた、などといった論理を実証してしまうハメになる。

久美子は後甲板に行って、デッキチェアのリクライニ

ングを調節した。ほぼ水平にすると、彼女は傍らでTシャツを脱いだ。ビキニタイプの水着のブラがあらわれた。純白の水着。最近流行の白ながら濡れても透けて見えない素材でつくられたやつだ。フリルが胸もとを飾り、深い谷を演出している。ズボンも脱いだ。スラリとした下肢をのばした肉感的な下半身が真夏の陽光に輝いた。久美子はトリコロールの parasol を開ける。思う存分、肌を焼けないのがテレビ番組をもっている人間の悲しいところ。大きなサングラスをかけ、リクライニングシートに寝そべった。直射日光はなくとも、甲板の照り返しもあるし、真夏はじゅうぶん体感できる。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

淑やかな晚餐

午前中一杯を費やして得た釣果は、活きのいいマダイが二匹と、雑魚が数匹だった。

万田船長は浮かぬ顔の由紀夫の肩を叩いて笑顔で励ました。大物はどちらも万田が釣りあげたのだった。

「それでも坊主じゃなかったのだから、たいしたもの

ですよ」

「一度、ぐっと手応えがあるのがかかったんだけどなあ」

舷梯からあがってきた由紀夫は妻のニヤニヤした顔を見るなり地団駄踏んで悔しがった。

「あら、雑魚と云って、骨も身もある立派な自然のお恵みですわ。素晴らしい昼食をお約束しますわ」幸子は魚籠をうけとると、由紀夫に言った。

「それにしても、釣りたてのタイって美しいものですねえ！」

久美子は船長がぶらさげている赤く染めあげられたようなマダイに見惚れた。彼女は水着の上にカーディガンを羽織っていた。しかしその胸もとから海藻パックされた直後の、まばゆいばかりにスベスベの白い肌が見えていた。タイの朱色に負けにくいぐらいの輝きだ。

「奥さん——」と、万田は甲板の隅におかれた直方体の生け簀にタイを放しながら、「タイだけじゃありませんよ。海のなかの魚はどれだって、皆、この程度には美しいのです。あの、これから唐揚げにされる雑魚だって、泳いでいる姿ときたら宝石のようですよ。午後、あなたはたっぷりと観察することになるでしょう」

「楽しみだわ！」

久美子は女子高生のように、両手を胸の前で組んで夢見るような表情をした。

由紀夫に釣りあげられた雑魚数匹は見事な狐色の衣をまとめて、食卓の中央に飾られた。

「味わって食えよな」愛しそうに箸でそれを摘みながら由紀夫は久美子に言った。

「ハイハイ」船長夫婦に首をすくめて見せ、久美子も前歯でかじりついた。新鮮な白身の味が口中に広がった。男二人はビールで乾杯し、漁の模様を詳しく語りあった。

久美子は生け簀の縁から飛びださんばかりに跳ねているマダイを横目で見ながら、その行く末を訊ねた。

「明日の夜のメインデッシュにしましょう」と幸子。「ああしておけば、二三日は新鮮なままでとっておけますから」

そうか、今夜は四国に上陸してリゾートホテルで彼らのもてなしを受けるのだった。久美子は船長のスケジュールを書きこんだ海図を思いだした。まだちっとも飽きていない。海のうえのほうがいいな、と久美子は思った。この快適な気分が途切れてしまうような気がしたのだ。陸上には人間たちがいて、彼らはきっと久美子の顔を知っている。そんな煩わしさを、できれば避けたいと思う。しかしまあ、まだヨットの生活は二週間余りつづくのだから、ときおり、息抜きをしておくのは必要なのだろう。久美子の脳裏に先程の不審な夢が横切った。由紀夫に話そうかどうしようか迷ったが、それこそこの

ひとときにミソをつけそうだった。幸子が言ったように、あれは軽い日射病だったにちがいない。今の幸子に疑わしい気配はまったくないわけだし、陸の空気を吸えば、気分も一新されるだろう。

由紀夫はいくぶん酔ったようだった。スモッグを通さない日ざしや潮の匂いを含んだ空気、エスペランサ二世号の心地よい揺れ、そして昨夜の疲れなどが相乗効果をもって、彼を気持ちよくさせたのだ。

船長は午後からのスキューバに備えてコップ半分程度しか口をつけていないので、ほとんど顔色も変わっていなかった。

由紀夫は久美子がマッサージを受けたデッキチェアに連れていかれ、ゴロリと寝かされた。

「……いいねえ、海は。海は最高だよ。ねえ、船長。最高だよねえ」

由紀夫は酩酊した口調で声を大きくした。

「まったく情けない。ビールでこんなになっちゃうんだから」

久美子は由紀夫の二の腕をつねりあげた。

「ハハハ、それほど、我々のことを信用してくださっているということでしょう。冥利に尽きますよ」

万田は百点満点の応答をした。

「それでは奥さん、今度は奥さんが海の素晴らしさを満喫する番です。さっそくウェットスーツに着替えてく

ださい」

「そうしますわ」

由紀夫のためにパラソルを拡げてやり、そして久美子は洋々とした足取りで船室へ向かった。

「いいぞ、久美子！」と、由紀夫が声をかけてきた。パチパチと力なく拍手までしている。「お前の抜群のプロポーションを船長にお見せしてやれ。バスト九十一、ウエスト六十三、ヒップが、えーと……えーと、いくつだったかなあ、あれ？ あの巨きなプリプリしたヒップは……九十だったっけ、久美子？」

「バ、バカ！ あなたは黙って眠ってらっしゃい！」

真っ赤になりながら久美子は船室へ駆けおりていった。

さすがに万田船長も副船長も紳士淑女であるから、久美子が身体にぴったりと貼りつくようなウェットスーツを着て、甲板にあらわれても意味ありげな視線をそれへ這わせるような真似はしなかった。由紀夫はチェアの上で高鼾をかいて寝入っている。頭を蹴飛ばしてやりたかったが、そうもいかず、久美子はボンベを舷梯のところまで運んだ。

由紀夫の指摘はたしかに正確ではあった。薄い赤紫色のウェットスーツは彼女の豊満なプロポーションを鮮やかに浮きたたせている。胸の双つのふくらみは密着するスーツにも負けずに夏蜜柑のような美しい球形を見せつ

けていた。腰の豊かさこそきわだっていた。ヒップの丸みから太腿へいたるラインの女らしさ。彼女のウェットスーツ姿にはヌードを連想させる艶かしさがあった。

黒いスーツに頑健な身を包んだ万田船長は、しばらく海に潜っていない久美子のために簡単なおさらいの講習をした。

飲みこみの早い久美子はすぐに要領を思いだした。スーツの頭部を、うしろに束ねた髪にかぶり、ゴーグルをはめ、ボンベからの吸入口を啜る。

船長が親指を突きだして、サミング。久美子もサミングして返す。ヒレのついた足でドタドタと舷梯の際まで行き、まず万田が、そして久美子が飛びこんだ。

一瞬にして、世界はパラダイスに変わった。透明度の高い海が青いシルクスクリーンと化して陽光を柔らかかに散逸させているのだった。そこへ酸素の美しい泡が歪みながら螺旋状に上昇していく。

船長が先になって、海底へ向かい泳いでいく。何度も久美子のほうへ振り返り、彼女を確認してくれるので、何の心配もなかった。最初に出会った魚は鋭く尖った鼻先を持った種類のものだった。数十の群れで二人の前を、悠々と回遊している。手を伸ばせば届きそうな距離なのが、愉快である。船長はさらに降下する合図した。海底には案外、すぐに到着した。昨日一晩でエスペラン

サ二世号はずいぶん四国に近づいたのかもしれない。

ゴツゴツと大きな岩場が彼らを迎えた。船長はライトをつけて辺りを照らした。海底の砂地に潜んでいたカレイのような魚がさっと砂煙をあげて暗闇へ逃げていった。大きな岩にしがみつきながら、久美子は初めて見る情景に心を奪われた。魚も、豊富とは言えないまでも飽きさせることなく視界を横切っていく。ユラユラとなびく長い海藻も神秘的である。

と、万田が久美子の肩を叩いた。彼がさした指の方向に目を向けると、丸い岩場にべっとりと貼りつくように、かなりの大きさのタコがいたのだった。タコは何かの目的で住みかの穴ぐらから出、そしてそこへ帰っていくようであった。

万田はゴーグルの奥で目を細め、手で捕まえる仕草をした。大きくうなづく久美子。二人はタコの背後からゆっくりと岩を伝っていった。吸盤のイボイボのついた足がすぐそこに見えた。久美子は思わず手を伸ばして捕まえようとした。しかしまだ距離がじゅうぶんではなかったのだ。海中ではすべての動作が緩慢になる。それを計算にいれないと失敗をおかすことになる。タコは彼女の手をするりとすり抜け、岩と岩の隙間に柔らかい身体を滑りこませようとした。慌てた久美子は岩を蹴って追いつがろうとする。すると、タコはお馴染みの防御方法で対抗した。真っ黒な墨をどっと吐いたのだ。モクモクと

沸きあがり、久美子の視界は包まれた。手で掻き乱そうとしたが効果はなかった。船長のほうを振り向こうとしたが、どっちがどの方向なのか、わからなくなった。

ふたつの大きな手のひらが、久美子の乳ぶさの丸みをおおってつかんだ。久美子はギクリとしたが、その手が万田以外のものであるはずがない。まず、船長に見捨てられたのではないのがわかり久美子はほっとした。パニック一歩手前の彼女を落ち着かせるためのスキンシップなのだろう。手は乳ぶさをきつく握りしめてきた。そして抱き起こすように万田は彼女とともに上昇をはじめた。その間ずっと、手は彼女の胸をさわりっぱなしであった。痴漢のような猥褻感のある愛撫ではなく、力強い握力でギュッと潰すような感じである。かなりの苦痛がスーツを通して伝わったが、だからこそ船長の海の男の逞しさを覚えるのだ。久美子に一点の疑念もない。

しかし冷静になって考えてみれば、何もわざわざ胸をつかまなくとも、腕をとればすむ話だろう。それにボンベを背負ったうしろから抱きつくというのも不自然な格好である。タコの墨の範囲からはとっくに出ているのだから、別々に海面へ泳いでもいいはずなのだ。久美子は怪我をしているわけではない。

この章の残りは有料本編でお読みください。

#####

虜

身体がだるくなるほど、久美子はよく眠っていたのだった。それでも丸い舷窓からさしこんでくる強い太陽光線が彼女を覚醒させた。

ベッドのうえに起きあがり、二日酔いのようにガンガンと痛む額を掌で押さえた。視線をおろすと、いきなり桃色の乳頭が霞んだ網膜に飛びこんできた。双つの乳首は朝勃ちの状態にピーンと尖っている。そういえば、昨夜、由紀夫がパジャマのボタンをはずしたのだ。その記憶は残っている。

ボタンをしめ直しながらあくびをする。ベッドには久美子一人しかいなかった。由紀夫の姿はなかった。しかしそれは当然であった。時計をみると、針は十一時を過ぎていたのだ。久美子は慌てて、パジャマを脱ぎ捨てた。洋上の朝は早い。十一時などもう一日の大半が終了した時間ではないか。

(起こしてくれればいいのに)

貴重な休暇の一日を台無しにした気分が久美子を憂鬱にさせた。もうひとつ、おかしい事実が彼女を苛立たせた。下着が、どこを探しても見えないのである。それど

ころか、衣装を入れてあるはずの大柄なトランクの姿が消えているではないか。あるのは薄手の半袖のTシャツと女子中学生の体操着のような紺のホットパンツが一組だけだ。久美子の所有物ではなく、たぶん、エスペランサ二世号の常備品である。花柄のパジャマで徘徊するわけにもいかないの、それを着たが、白のTシャツは薄すぎて、ノーブラの乳首がツンとかたちを見せてしまう。きっと、いくらかでも汗を掻けば、その色はくっきりと透けてしまうだろう。

久美子はわけのわからぬまま、船室を出た。調理場にも食堂にも人影はなかった。不気味な静けさが船内を包んでいる。エンジンの音も聴こえない。ヨットは静止しているようだった。

タラップを駆け上がり、甲板に顔をだした。青空とキラキラした太陽が彼女を迎えた。眠りすぎの目には眩しすぎた。

島が、エスペランサ二世号の左舷前方に忽然と浮かんでいた。船との距離、約五百メートル。島というより、岩礁と呼んだほうがいいような小さな島だ。紺碧の海面から、暗褐色の岩肌が突きだし、その基底部に波が白く砕けている。島の山頂にかすかに植物の姿があり、そこを中心にして海鳥たちが楕円の軌道で旋回していた。

「あら、お目覚めですか？」

幸子が背後にいた。笑顔はなく、久美子の寝坊を責め

ているようでもある。

「御免なさい」と、まずは詫び、久美子は島を指さした。「例の無人島ですか？」

幸子は無言のままうなずいた。とくにその瞳には昨夜までの優しげな眼ざしはなく、冷淡な敵意すら感じさせる光がある。久美子はそれを見ないようにして、島に顔を向けながら、由紀夫の行方を訊ねた。

「ご亭主だったら——」と、幸子はそう言った。「船長と一緒に上陸してますわ」

幸子は島をあごでしゃくった。よく見ると、島の最もなだらかに海上へ接している部分に無人のゴムボートが揺れているのだった。そこはわずかではあるが砂地になっていて唯一上陸できる場所なのであろう。

（ご亭主……？）久美子は幸子の言葉を反芻してみた。ずいぶん、はすっぱな言い方である。昨日はたしか、平松さんとか、ご主人、などと言っていたはずだが……。久美子は横目でチラチラと幸子をうかがい、日焼けしたその顔の裏側の真意を探ろうと努めた。

「残念」久美子は明るさを装って指を鳴らした。「おいてきぼりを食ったんですわね。せっかくの無人島探険だっていうのに失敗だったわ！」

「仕方がありませんね。あなたの自業自得ですわ」
奥様という呼び名もなくなっている。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

裸に剥かれる

じっとしていても、あごの先から、乳ぶさの先っぽから、蠟のような生汗がタラタラと滴った。何度か、梯子をあがり、閉ざされた丸い扉を拳で打ちつけてみたがびくともせず、声をかぎりに叫んでもエンジンの音にかき消されるばかりである。

しだいにはっきりとしてきたのが、エスペランサ二世号はちっとも動いている様子がないということである。加速や減速のGは感じられず、方向転換の時に生じる遠心力もない。つまり、エンジンをかけているのはヨットを移動させるためではなく、ただ単にエンジン室の久美子を悩ませるためにやっているとしか思われぬのだ。

(……まるで拷問だわ……) 久美子は唇を噛みしめながら、怒りをにじませた。と同時に、冷静になるよう、自分自身に言いきかせる理性も疎かにしなかった。ジャーナリズムに籍をおいている彼女はまだ二十代ではあるが、自分をコントロールするすべをじゅうぶんに訓練されている。

むしろ、自分よりも由紀夫の安否が気にかかってならない。残念ながら、万田船長と由紀夫の体力のちがいを思い浮べて、久美子は暗澹とした気分にならざるをえなかった。自然のサバイバルにおける経験や知識だって、圧倒的な差があるはずだ。いったい万田夫婦が何を企んでいるのか、見当もつかないが、彼らの計画に由紀夫が必要な存在であるのを願うばかりである。もしそうでなければ……。

久美子はがぶりを振って、最悪の想像を打ち消した。

突然、エンジン音の調子が変わった。思うまもなく鼓膜を圧していた機械音は急激に小さくなっていった。ピストンやシリンダーの上下動も速度を緩めていき、やがて停止した。すべてが停まっても、まだ久美子の耳には圧迫感があり、聴力はすぐには戻ってこなかった。

(何かが始まるんだわ) 直観的にそう思い、彼女の視線はハッチに集中する。鈍感な聴覚が天井にコツコツと響く靴音を辛うじて聞きとった。久美子は全身を緊張させた。自分が上半身裸でいるのに気づき、慌ててグショグショに濡れたTシャツをかぶった。赤い乳首がすっかり透けていた。

回復してきた久美子の耳は、二種類の靴音を判別した。万田が帰ってきたのだろう。緊張はなおさら高まる。

「サクランボの様子はどうだった？」

たしかに万田の声だった。とくに疲労の色はなく、それは由紀夫の運命にとってプラスなのかマイナスなのか、久美子はとっさに判断しかねた。

「被疑者は当初、私を油断させるために稚拙な演技をしていました」と、幸子の声があった。「デッキチェアなんかだしてきて、日光浴を楽しんでいる風を装い、私の命令に服従しているかのような態度でしたが、虎視眈々とディンギーを奪いとる隙をうかがっている魂胆は明白でした」

幸子の報告は手柄を吹聴できる喜びに溢れている。

「牝狐め。亭主以上に賢そうだから、油断は禁物だ」
それから万田は幸子の労をねぎらった。

「それにしても副船長の今回の働きは特筆に値する。反乱人の意図を素早く察知し、速やかに鎮圧して、エスペランサ二世号の危難を未然に防いだ功労は勲章ものと言える。今回のプログラムも、これでとどこおりなく消化できるだろう」

(プログラム?) 久美子は耳に入ったその言葉を繰り返した。

「船長こそ、雄狐をかすり傷ひとつなく処置したのですから、いつもながらその腕には感服いたしますわ」

「なーに。今回の雄狐は最もたやすかったわい。歯応えがなくて、がっかりしたくらいだ。一筋縄でいかないのは、むしろこっちのほうだと期待しておる」

ハッチのロックがはずされる音がした。そのまま、一条の光がさしこんできた。完全に開かれると、ふたつの顔がこちらを覗きこんだ。

「ホッホ。こちらを睨みつけておるぞ。不潔な顔をしているくせに」と、万田は言った。

昨日までの人の良さそうな彼とは別人である。敬愛と友好に満ちていた瞳の輝きは、敵意と侮蔑と、そして淫靡なそれに変わっている。

「出てきなさい。船長がお呼びよ！」幸子が怒気を含んだ大声を張りあげた。

ここで頑張っても埒があかない。久美子は梯子に手をかけた。二人の足元に顔をだす。船長は迷彩服を着こんでいた。革靴が泥で汚れている以外は、ほとんど乱れはない。片手に杖のように猟銃を持って、床に銃把をおいている。赤銅色の顔がますますギラついているようだった。

久美子はゆっくりと彼らの間に立ちあがった。

「これはどういうことです、船長。夫をどうしたのですか」

正面の万田を見すえて低い声で言った。

「いい度胸だ。怯えた様子がない。自分の身より先に亭主を気遣う情もあるようだ。いい素材のようだな」

久美子を見すえ、万田は久美子の背後の幸子に話しかけている。

「船長、即断はいけません。すべてを調査してからでないと、評価はくだせません」と、幸子は言った。

「フフフ。副船長の冷静さは見倣うべき美德だ」

彼の視線は久美子の身体を値踏みするように頭から爪先へと行き来し、そして最後に胸の双つの突起に落ちついた。

久美子は憤然として言い放つ。胸を隠すのも忌々しい。

「船長、教えてください。夫は無事なのですか」

汗ばんだ顔をきつくひきつらせて、万田の目を射るように見る。

万田はネメつけるように久美子の顔を一瞥し、幸子に言った。

「副船長。手錠をかけなさい」

「わかりました、船長――」

嬉しそうに幸子は久美子の両手を背後からつかみとり、力任せに背中へねじあげた。

久美子は荒々しいその行為に小声を発したが、とくに抵抗することなく、されるがまま。幸子の怪力は体験済みだし、自分の体力もかなり消耗していた。ここで争っても得ではないと判断したのだろう。ただじっと万田を睨みつけ、毅然とした態度を崩さない。

とは言っても、薄いTシャツの生地をまるで薄皮のようにまとわりつかせた乳ぶさの、桃色の乳肌までを万田

の視線がネメつけば、さしもの彼女も顔から火がでる思いだった。

たっぷりと時間をかけて、万田は久美子の肉体を吟味していた。美貌は熱と怒りでもって紅潮し、毛先まで汗で濡れた頭髪のほつれ毛が額や頬に貼りついていて、身体の線は、露骨なまでに強調されている。胸ばかりではなく、Tシャツは今や皮膚の一部と同化したようで、上気した素肌を透かしている。縦長の臍窩までが仇っぽく窪んでいた。

短パンこそ、紺色なので股間が覗かれはしなかったけれど、失禁したような汗のシミが前の部分を葉の形におおっていた。まばゆく桃色に火照った両の太腿は、いつもは乳脂を練りあわせたように濃密な肉の密度を持っているのに、毛孔が開いてブツブツと目立っている。脛もふくらはぎもオイルを塗ったような汗が光っていた。

美しい女体は甘酸っぱい体臭をふんぷんとさせて立ち尽くしていた。万田がその魅力にしばし声を失って見惚れていたのは明らかだったが、ふと、我に返って重々しく言うのである。

「我々の寝室へ、連行する」

万田はくるりときびすを返し、つっと歩きだした。

「さ、行くんだよ！」

例の警棒で久美子の背中を小突き、幸子が追いたてた。

「押さなくたって歩くわよ」

「質問に答える以外、被疑者は私語厳禁！」

「……あなたたちはおかしいわ……」

久美子はつぶやくように吐き捨てた。

この章の残りは有料本編でお読みください。

#####/

第三章 幽閉島

計画

久美子はわずかばかりの砂浜を走りぬけ、ゴツゴツとした岩肌に駆けあがった。島の頂上へむかって急激に勾配を強める斜面を、夫の名を呼びながらまるでロッククライミングの要領で登っていった。岩肌は強い日ざしを受けて高熱を帯びてい、久美子の履いている底の薄いサンダルは、今にも融けてしまいそうである。

「あなたっ……」

自分よりも大きな岩の陰に、由紀夫を発見すると、久美子は思わず悲鳴を発してしまった。傾斜した地面から

突き出すような、つまり海面とほぼ平行な角度の岩のうえに由紀夫は寝かされていた。意識を失っているらしく、横に伏せた顔は蒼白で、固く瞼を閉ざしていた。ズボンをきり裂かれ、露出した右足の太腿からかなりの量の血が流れていた。それは岩の表面に滴り落ち、すでにすっかり乾いている。どうやら出血は止まっているようだ。

「由紀夫さんっ、しっかり！」

取りついて、肩を揺さぶると、由紀夫は首を起こして薄目を開けた。

「……久美子？……」

妻の顔は理解したが、意識はまだ深い靄に霞んでおり、記憶は戻ってこない。久美子はペットボトルから水を由紀夫の唇へ垂らした。

「久美子……久美子！」

正気づいた由紀夫の瞳が大きく見開かれた。最悪の状況を思いだしたのだ。由紀夫は久美子の泣きそうな表情から事態の悪化が彼女にまで及んだのをとっさに悟った。

「大丈夫なのか。君は……」

身体に傷がないかどうか、力のない手で久美子の肩や二の腕をさわる。

「大丈夫よ。何もされなかったわ」

自分の傷よりも先におもんばかってくれた由紀夫の愛

情に涙ぐみながら、久美子は嘘をついた。丸裸に剥かれた事実など、とても口にできない。

「治療しなくちゃ」

救急鞆から抗生物質のアンプルと注射器をとりだし、たどたどしい手つきで彼の腕に針をさしこんだ。

「……久美子が看護婦の資格を持っていたとは知らなかったよ……」

由紀夫は微笑みながら言った。

「麻薬中毒なら誰だってやるわよ。高校生だって主婦だって」

注射を終えると、傷口の消毒にかかる。万田の言ったとおり、銃弾は綺麗に太腿の肉を貫通していた。出血もさほどの量ではないようだ。由紀夫の状態は傷の症状というより、銃撃されたショックによるものと言ったほうがいいのだろう。

患部に薬を塗り、包帯を巻く。

「あいつがそれを？」

無言でうなづく久美子。

「良心の呵責に耐えかねたとでも言うのかな」

軽口を叩いたが、由紀夫は傷の痛みに顔をしかめた。

とりあえず手当てをすませると、由紀夫は久美子の肩を借りて、寝かされていた岩から、日陰になっている部分へ移動した。岩に背をもたれさせて、起きた体勢を維持した。久美子も隣へ腰をおろした。

そこからは海が見渡せた。どこまでも限りなく紺碧のパノラマがつづいている。そして島のおよそ500メートルほどのところに、エスペランサ二世号の白い船体が悠然と停泊していた。何事もなかったかのように、静かで、美しい眺めであった。

「本当にひどいことはされなかったんだね？」由紀夫はもう一度念を押した。

「副船長に下着を没収されたけど、それだけよ」
彼の目がしきりにノーブラの胸に向けられていたの
で、久美子はそう答えた。

「畜生っ」と、由紀夫は唾棄するように罵った。「万田の奴、突然、本性を剥きだしにしゃがったんだ！」

由紀夫は午前中の悪夢について語りだした。由紀夫は朝、万田に起こされると二日酔いの頭を我慢して無人島探険に同行した。久美子は何度声をかけても目を覚まさなかったの、万田の忠告もあり、そのままにした。目が覚めしだい、幸子が島に送ると万田は確約したのだ。

「あいつ、こんな服まで用意していて。すっかりだまされた」

由紀夫も迷彩服を着ていた。サイズがあわず、ブカブカ。袖に手が隠れてしまっている。

最初のうちは、それでもこれまでと同じ調子で万田は由紀夫に接していた。それが、海鳥を一羽、仕留めてから態度が豹変したのだった。

「あの野郎、撃たれて、落ちて、藻搔いている鳥の頭を素手で握り潰しやがった」

その情景を思いだしたように由紀夫は身震いした。久美子は彼の手を握って落ち着かせた。次に彼が銃口を向けたのは鳥ではなく、由紀夫だったのである。もちろん由紀夫は逃げたが、万田の身軽さ、体力の強靱さは想像を絶するほどだったという。それでもほぼ二時間に渡って由紀夫は島中を逃げまわったが、彼が健闘したのではなく、万田が本気で捕まえようとはせず、ゲームのように追跡を楽しんでいたからであろう。とにかく、彼はこの島の地形に異常に詳しくかったので、つねに由紀夫の逃走経路の先にまわりこんでいるのだった。岩の一枚一枚まで番号を符って覚えている、そんな印象だった。

結局、由紀夫はへとへとになって動けなくなったところを捕まった。さらに殴り倒され、蹴飛ばされ、グロッキーにされた。完全に反撃の芽を摘むと、万田は由紀夫を先程の岩に担ぎあげ、太腿に銃口を押しあててひき金をひいたのだ。

この章の残りは有料本編でお読みください。

#####

第四章 海賊の女

美囚

海霧があたりをおおっていた。それは島ばかりでなく海面にも漂い、錨泊しているエスペランサ二世号の船体をもぼやかしているのだった。

静かな夜明けを震わせるようなけたたましいサイレンが響き渡った。

二人は固唾を呑んで岩影から海をうかがっている。

今日がどういう日か、彼らにはわかりすぎるほどわかっていたが、互いにそれを気づかれまいとでもするかのように無言だった。

久美子は由紀夫の迷彩服を着ていた。その下に、肩から吊りさげるようにペットボトルを縛りつけた。なんとか外からは誤魔化せるようである。ペットボトルには砂浜の砂が詰めこまれ、由紀夫のズボンのベルトをくくりつけてある。

「立派なブラックジャックだよ。へへへ。万田の奴、靴も時計も持っていったくせにベルトをそのままにしていくとは失敗だったな。それとも首をくくらせるためにわざと残していったか」

「変なことを言わないで」久美子はたしなめた。

「いいから。これも忘れずに」

渡された注射器を久美子は悲壮な表情で胸のポケットにしまった。熟睡したせいか、由紀夫は気分がいいようであった。

「来るわ！」久美子は瞳を凝らして、霧のなかのエスペランサ二世号からゴムボートが離れるのを発見した。かすかなエンジン音が聴こえてきた。万田とおぼしき人影が、黒いシルエットとなっていた。

「久美子——」由紀夫はせかされたように妻の手を握った。「たとえどんなことになるうとも、僕は君の味方だよ。そして君を愛している。絶対だ。信じてくれるね」

由紀夫の思い詰めた表情に、久美子は熱いものがこみあげてくるのをこらえながら、強く手を握り返した。言葉にすると泣きだしそうなので、由紀夫の頬に口づけした。由紀夫はその唇に自分の唇を重ねた。

「——おはよう、諸君！」

万田の声が轟いた。機械で増幅された声が割れ鐘のようである。見ると、ボートは波打ち際から十メートルほどのところで揺れており、立ちあがった万田は左手に拡声器を持ち、右の小脇には猟銃を挟んでいた。昨日とは違って変わって上下白のスーツを着こんでいた。徳島のリゾートホテルでのディナーに着ていた金モールのあれである。船長然とした帽子も忘れてはいない。

「もう起きていただけるうね。記念すべき朝だ。ワクワクするじゃないか！」

岩陰からかすかに顔をだして久美子と由紀夫は彼を覗いた。由紀夫は舌打ちした。

「……もう少し近づいてくれないとやりにくいな」

彼は石をぶつけて万田の気をひこうとしているのだ。

「なんとかやってみるわ」久美子はささやいた。

「すぐに姿を見せないで焦らしてやれ」

あまり言われるままに行動すると、かえって不審を招くかもしれない。なにしろ久美子の気性の激しさは昨日で万田にもわかっているだろう。女豹が妙におとなしいときは何かあると勘繰るのが普通なのだ。

「さて、奥さん。ゆっくりと姿をあらわしなさい」万田は言った。「手に何も持っていないことを示すように、両手を頭のうえにあげて出てくるんだ」

静けさがあたりを満たした。一分、二分と、じりじりするように時が経過した。

——「あまり間際になって別れを惜しんでいると、離れがたくなる。いい加減にしたほうがいい。いずれ従うしかないのだ。頭のいい君たちならわかるはずだ」

再び沈黙。万田は空に向けて猟銃を発砲した。

「猶予はあと十秒だ。奥さん。それをすぎれば今日はもう迎えにこないぞ。水、食料はもちろん、薬も包帯もなしということになる。いいのかね？　ここは清潔な都

会ではない。病原菌はウヨウヨいると思ったほうがいい。破傷風にかかったらとり返しがつかんぞ。油断してはいかん。あと十秒だけだ」

久美子はようやく岩陰から立ちあがった。両手を捕虜のように頭上に乗せ、岩肌をおりて砂地にでた。

「フフフ。よろしい。やっと私に抱かれる気になったか。ちがう女になる決心がついたのだな」

万田船長は拡声器のなかで嘲笑するのだった。

久美子は波打ち際まで来ると、万田に叫んだ。

「彼は熱が出てるわ。薬が必要よ！」

「奥さん。熱くらい出るのは当然なのだよ。銃弾が肉を貫通したんだからね。心配することはない。さ、泳いできて乗りなさい。亭主など、ヨットのベッドへ入れればすぐに忘れるさ」

「駄目。すぐに渡してくれないと、私は行かないわ。夫とここで飢え死にする道を選びます」

万田は苦笑する。

「奥さん。権力者は私だ。なんなら今すぐご亭主を撃ち殺し、あなたをレイプしてもかまわないんだよ」

久美子は由紀夫が潜んでいる岩陰を振り返り、もう駄目だわ、という表情をしてみせた。そして海へ入っていき、太腿まで水に浸かった。万田は小さなオールを漕いで、ボートを彼女へ進めた。じゅうぶんではなかったが、それでも島との距離は多少縮まった。

久美子は首根っ子をつかまれて、ボートにひきずりあげられた。その力強さに内心恐怖しないわけにはいかなかったが、奥歯を噛み締めて震えに耐えた。

「最後までてこずらせるんだねえ、奥さん」

万田は久美子に言ったが、拡声器のスイッチを入れたままなので、その声も霧をついて由紀夫の耳にまで届いた。

「遅刻をした奴隷はそれ相応の罰を受けるのだ。幸子はその巨きなお尻を五発、中華鍋で叩きつける」

万田は久美子を見おろしながら冷たく笑った。銃口を彼女の胸に突きつけ、それで迷彩服の前をこじ開けた。久美子はブラックジャックが発見されるのではと心臓が止まりそうだったが、万田は透けた『サクランボ』を目にすると満足したらしく銃口を放した。

「真っ赤に火照ったお尻を、ベッドのなかでみっちり撫でまわしてやる。いつもより何倍も気持ちいいだろう」

「万田あああ！」

カッとなった由紀夫の声がボートまで聴こえてきた。

以下は有料本編でお読みください。

#####